



戸惑う患者から 賢い患者になるための道案内

⑩認知症の人の受診について考えてみましょう…。

佐久大学・看護学部長 堀内 ふき

最近は認知症に関する情報がたくさん得られるようになりました。テレビの情報番組やドラマの中に出てくる認知症の方、あるいは映画でも題材として扱われることが多くなっています。

これらをご覧になって、自分がもし認知症になったらどのように治療やケアを受けることになるのだろうと不安になったり、ここまで医療が進んでいるのなら治療や社会のサポートを期待できるだろうとか、また、家族や身内、さらには近隣の人や知人がそうになったら自分は何をサポート出来るのだろうなどと、さまざまに考えを巡らすことと思います。

そこで、今日はまず、認知症かもしれないという問題に直面したらどう思うのか、あるいは親や配偶者が変だと思った時にはどう考えたらよいのかを考えてみたいと思います。

【認知症と診断されることは…】

認知症と診断された人は、どのような気持ちなのでしょう。昔は、病気と認識できず、何もわからなくなると捉えられていました。しかし、それは大きな間違いであったことを、クリスティーン・ブライデンという人が教えてくれました。クリスティーンさんは、1995年に46歳で認知症と診断されてからこれまで、当事者の言葉として多くを語ってくれています。そして、当事者の方の発言によって認知症について述べるときには認知症患者といわずに認知症の人と述べるようになってきました。患者(patient)という言葉には、不完全であるとか、望ましくない状況といった意味合いが含まれているからです。つまり、認知症の人(person)と言う、包括的な人間性を意味する言葉を使って、その人を捉えるということに、世の中が変わりました。

さて、そうはいっても、いまだ社会における認知症に対する見方にはマイナスイメージが強くあります。ですので、認知症かもしれないと思った時には、診断をしてもらいたいとは思わなかったり、もし病気だと言われても認めたくな

いのが心情だと思います。人々は認知症というレッテルを張り、周囲の力によって認知症の人という役割を取らせてしまうことがあります。それは、起こっているあらゆることを認知症のせいと決めつけてしまうことになってしまいがちです。例えば、外来で受診したときに、お金を払い忘れたり、靴を履き間違えたり、予約の日を間違えたりしたら、その人のことを認知症のせいだと思ってしまっているのではないのでしょうか。確かに、認知機能が落ちてきている時には、薬の間違いなどがあってはいけけないので、できたら家族の同行を求めたいと以前に書きました。それは必要なことですが、認知症だから、できないからと決めつけた対応というのではなく、認知機能が低下した時にはそれを一緒に乗り越えてくれるケアパートナーが必要な状況になっているということなのです。

認知症かもしれないと思って受診した外来で、認知機能のテストを受けるのも、とても辛いことでしょう。皆様も、人前で話すときに緊張のあまり頭の中が真っ白になったことはありませんか。認知症の人は、頭の中に雲がかかったようにもやもやしている所に、いろいろ質問して、わからないで恥ずかしくなるというような状況が起こることは避けたいものです。このような試験を受けるような受診は、きっと嫌なことであろうと、相手の方の立場に立って物事を考えたいものです。家族の様子が変だからといって、無理やり受診に連れて行くのではなく、本人も何か変と不安になっていることを理解して、受診を話し合えるような対応が必要なのではないでしょうか。時には、先に家族だけが相談してみることもできます。

今回はコンコーダンスと言うことばを、患者さんの主体性と言う言葉から説明しましたが、認知症の人には沢山のできること、わかっていることがあります。私たちは、認知症の人の気持ちに沿って、認知症の人が主人公になる受診に、パートナーとして付き添いたいものです。

2015 佐久大学公開講座 ～賢い患者になるための「患者学」～

第1回

7月20日(月)

6回講座開催予定

地域ぐるみで取り組もう!!

いざという時に賢い患者になるために

※詳細お申し込みは別添折込をご覧ください!!